

## [40] オーストラリア・バレエ団

### ～たおやかにして繊細～

1996年5月9日 東京新聞 夕刊

羊とコアラで有名なオーストラリア。その国のバレエと聞くと、知らない人はちよつと首をかしげるかもしれない。ところが最近、この南太平洋の国のバレエが急速に実力を伸ばしてきた。一九六二年に国の助成を受けて創立されてからまだ三十五年のオーストラリア・バレエ団である。

この地にバレエの種がまかれたのは、今世紀初頭のディアギレフ率いるバレエ・リュッスがきっかけである。そのメンバーだったポロヴァンスキ―という人が私的なバレエ団を組織し、二十年ほどは細々と活動していた。となれば日本のバレエとたいして事情が異なっていたわけでもない。

\* \* \*

もつとも、オーストラリアは英国とのつながりが非常に深い。そこで本国の英国ロイヤル・バレエから有力な指導者が訪れて正しいメソッドを伝え、フォンテンなど世界的なバレリーナを招いては、それを手本にスタイルを磨くことが可能だった。言うならば、オーストラリア・バレエは英国ロイヤル・バレエの出店と言った感じでもある。七〇年代の初めには、世界ツアーにヌレエフが参加した。彼の主演が客寄せになって大成功、バレエ団としての名声が高まったのも事実である。

## [40] オーストラリア・バレエ団

### ～たおやかにして繊細～

1996年5月9日 東京新聞 夕刊

だがその頃のオーストラリア・バレエ団は、下手というわけではないけれども、何となく的絞りにきれいなところもあった。ヌレエフが演出し主演した『ドン・キホーテ』のビデオを見直してみても、伸びやかではあるが、大味で薄味という印象はぬぐいがたい。

それがここにきてめざましくレベルが上がったのは、どういうわけだろうか。昨年十月の来日公演も、『コツペリア』ではきめが細かく透明感のある舞台作りには引き込まれたし、『マノン』のほうは奥行きのある深いドラマ性があった、その少し前に来日したABTの『マノン』よりずっと出来がいい。

風評では、一九八三年から芸術監督の座にあったメーナ・ギールグッドの手腕によるという見方がもつぱらである。笑顔が華やかな細身の美人なのだが、なかなか筋の通った考えの持ち主のように、舞台のすみずみまで女らしい神経が行き届いている。繊細すぎて骨太の迫力に欠けるとか、ゆるぎない統一感の反面ずばぬけたスターがいないなど、物足りない面もないではないが、聞けばそれも女史の方針なのだそう。軽々しく大向こうをねらうより、手堅く芸術性を追求しているのだろう。

## [40] オーストラリア・バレエ団

### ～たおやかにして繊細～

1996年5月9日 東京新聞 夕刊

\* \* \*

だが、芸術監督の個性とは別に、オーストラリアという国の特色を見ることもできるのではないだろうか。つまり、正統的な格調と栄光で世界に冠たるイギリスを志向しながらも、そこから一步引いて、たおやかに繊細であること。英国ロイヤル・バレエを堂々たる男性とすれば、オーストラリア・バレエはそれとお似合いの女性だということもできそうだ。

ともあれ功績を残したギールグッド監督も、今年から名門デンマーク・ロイヤル・バレエに就任した。新しい芸術監督に率いられるオーストラリア・バレエが今後どのような展開を見せるか、目の離せないところだが、それと同時に、若いバレエ団がこんあにも立派に成長するのだということも、遠い国の話としてではなく日本の問題とも絡めて、じっくりと考えてみるのもいいかもしれない。